

助数詞クイズで楽しもう

【板書事項】

電車	ア	枚
植木	イ	棹
靴下	ウ	両
テニスコート	エ	丁
豆腐	オ	面
板	カ	足
タンス	キ	株

例 イカの数え方は？

答え(生きている時は「匹」、ひとたび商品になって市場に出ると「杯」)

いわれ(形状がふくらんだ形の器に似ているので、その器を表す杯で数える。イカの胴体は、イカ飯やイカ徳利にできるような形。『杯』と書かれた優勝カップやトロフィーを思い浮かべてみましょう。)

調べた本

「数え方の辞典」

飯田朝子・著(小学館)

【指導の流れ】

1 助数詞のクイズに答えさせる。

「ものの数え方には、きまりがあります。牛乳びんなら一本二本、猫なら一匹二匹ですね。「本」や「匹」を「助数詞」といいます。助数詞は、日本語の文化であり、言葉の表現の豊かさでもあります。」

「黒板のくままでのものと合う、アからキまでの助数詞を線で結んでみましょう。」

「正解は ウ、キ、カ、オ、エ、ア、イです。」

2 助数詞クイズを作らせる。

「みなさん、「助数詞クイズ」を作ってみましょう。クイズは短冊に書いて掲示します。そのように数える理由やいわれも書きます。取材した本や人も明らかにします。」

「意外性が勝負です。例えば、八百屋さんや魚屋さんに出かけて行って、変わったものの数え方を聞いてくると面白いものがあるかもしれませぬね。」

【留意点】

1 助数詞は面倒なものとして敬遠され、つい「一つ」「一個」ですませてしまふ児童もいる。日本人が、数える対象をどのようにとらえているかを映し出している言葉だということに気付かせたい。

動物の数え方(匹・頭など)にふれるのもよい。つまり、人間の大きさを基準にして数え分けていることを知らせる。人間より大きい動物は「頭」、人間より小さい動物は「匹」、人間と同じくらいの大きさの動物は「頭」でも「匹」でも数える。

2 生きている魚は「匹」で数えるが、釣りの獲物や鮮魚店の商品になると「尾」になる。また、成虫は「匹」で数えるが、さなぎは動かないので「個」で数えるなど、形状や性質に応じて変わることを知らせることも、興味をもたせるきっかけとなる。